

ЗЕРКАЛО

アンドレイ  
タルコフスキー  
監督作品

……そして雨。

脚本  
アレクサンドル・ミシャーリン  
アンドレイ・タルコフスキー

しづなは冷たい枝をつたわり

撮影  
ゲオルギー・レルベルグ

言葉でもハンカチでも

音楽  
エドゥアルド・アルテミエフ

ぬぐうことはできない。

詩アルセニー・タルコフスキー  
詩朗読インノケンティ・スモクトゥフスキー

夢…追憶…運命。

マルガリータ・テレホワ

あやなす心の深奥を

オレーグ・ヤンコフスキー

イグナート・ダニルツェフ

フィリップ・ヤンコフスキー

華麗な映像で描く

モスフィルム [1975年製作]  
配給・提供 日本海映画 *Sorexportfilm*

鬼才タルコフスキーの世界。



アンドレイ・タルコフスキー監督

# 鏡

ЗЕРКАЛО

モスフィルム[1975年製作]  
配給・提供 日本海映画

Sovexportfilm

### ■解説

少年バルチザンの目を通して戦争を描いた「僕の村は戦場だった」(62年ベネチア映画祭グランプリ)、15世紀前半に生きた聖像画家ルブリョフの生涯を描いた「アンドレイ・ルブリョフ」(67年カンヌ映画祭国際批評家賞)、ポーランドのスタニスワフ・レム原作のSF映画「惑星ソラリス」(72年カンヌ映画祭審査員特別賞)と算作ながら、国際映画祭での連続受賞をはたしてきたアンドレイ・タルコフスキー監督が、今、非常に私的なテーマにとりくんだ。これまでの叙事詩的な世界から、彼は一気に、主観的な詩の分野へと転じた。

「鏡」は、母に対する作者の心理、別れた妻と息子との関係を描いた、タルコフスキーの自伝的作品である。そして、この映画は、作者の意識下の過去を現実と交錯させながら、タルコフスキー独自の巧みな映像表現で、作者の深層心理を鮮烈なイメージにして浮かびあがらせている。

くわえて、1934年ソ連成層圏飛行、スベイン戦争、第二次世界大戦、中国の文化大革命、中ソ国境紛争(タマンスキー事件)など、数多くの記録フィルムの断片が挿入され、歴史的現実が人々にもたらさずにはいない種々な影響を暗示している。

撮影は、「ワーニャ伯父さん」のゲオルギー・レルベルグが、ロシアの自然を見事な映像でとらえ、音楽は、「惑星ソラリス」のエドゥアルド・アルテミエフが、この映画でもパツハを使用している。出演者は、母マリアと妻ナタリアの二役を、来日したこともあるモスクワの人気舞台女優マルガリータ・テレホワ、父親役にはモスクワドラマ劇場のオレグ・ヤンコフスキー、さらに、彼の息子フィリップ・ヤンコフスキーが、作者の幼年時代を演じて親子共演し、アナトリー・ソロニツィンやニコライ・グリニコといったタルコフスキー映画の常連が脇をかためている。

また、名優インノケンティ・スモクトゥノフスキーがナレーションを読んでるほか、監督自らが、著名な詩人である父、アルセニ・タルコフスキーの詩を朗読している。

### ■ストーリー

私は、いつもかならず同じ夢をみる。夢はいつも、40数年前に私が生まれた祖父の家へと私をいざなってくれる。

うつつと茂る木立に囲まれた家の中で、母は、たらいに水を入れ、髪を洗っている。鏡に映った水がしたたる母の髪が、ゆれている。あれは1935年、田舎の干し草置場で火事があった時のこと。その年から父は、家からいなくなつた。突然の母からの電話で、夢から醒める。母からエリザベータが死んだことを知らされた。彼女は、母がセルブホフカ印刷所で働いていた時の同僚である。母が、国立出版所の原稿に校正ミスがあつたのでないかと、案じて、しつこく雨をおして、印刷所に出むいたあの時に、エリザベータは、母の父に対するわが



ままな態度をなじつたのだった。

両親と同様、私も妻ナタリアとは別れた。ナタリアから、イグナートを一週間あづかってくれといわれた時、そうだ、イグナートと電話で言葉を交わした瞬間、私は、彼と同じ年頃の時代の事々を思い出した。赤毛の、唇がいつもかわいて荒れていた初恋の女の子のこと。軍事教練のこと。そして、大戦中、モスクワからユリエヴエツに疎開している時、母に連れられて16キロもの道のりを、ザヴラジエに祖父の知人をたずねて行き、宝石をお金にかえようとしたこと……。

そして、哀れだった母のことが、母の負担になつたであろう少年時代の記憶が、同じ境遇をたどっているイグナートのことが、私を苦しめる……。

タルコフスキーは難解だという人が多いが、私はそうは思わない。タルコフスキーの感性が並はずれて鋭いだけだ。

「鏡」は、彼の幼い頃の思い出を描いた映画だが、これも難解だという人が多い。成程、一見、脈絡もない展開をする映画だ。

しかし、幼い頃の思い出が理路整然とながつている筈はない。その、きれぎれの思い出の断片の奇妙なつながりにこそ幼い頃の思い出の詩がある。

そう思ってみれば、こんな判りやすい映画はない。

でも、タルコフスキーは、そんな事なんにも云わずに黙っている。

私は、そこにタルコフスキーの将来性を見る。自分の作品の解説ばかりしてる様な奴は見込みはない。

黒澤明

### 〈スタッフ〉

脚本……アレクサンドル・ミシャーリン  
アンドレイ・タルコフスキー  
監督……アンドレイ・タルコフスキー  
撮影……ゲオルギー・レルベルグ  
音楽……エドゥアルド・アルテミエフ  
挿入詩……アルセニ・タルコフスキー  
ソビエト映画/モスフィルム製作  
1975年/カラー・スタンダード/1時間48分

### 〈キャスト〉

母マリア/妻ナタリア(2役)……マルガリータ・テレホワ  
父(少年時代)/息子イグナート(2役)……オレグ・ヤンコフスキー  
……イグナート・ダニルツェフ  
私(幼年時代)……フィリップ・ヤンコフスキー  
行きずりの医者……アナトリー・ソロニツィン  
イヴァン……ニコライ・グリニコ  
詩朗読……アンドレイ・タルコフスキー  
ナレーション……インノケンティ・スモクトゥノフスキー

6月14日(土)より  
エキブ・ド・シネマ  
ロードショー

●地下鉄(都営三田線・新宿線)神保町・下車1分 国電(中央線)水道橋駅またはお茶の水駅・下車7分 ●神保町交差点

岩波ホール (262) 5252

お得な特別鑑賞券1000円

(当日は一般・学生とも1,300円)  
岩波ホールチケットガイド(ビル1階)のほか都内各プレイガイドにて好評発売中/団体のお申込み・お問い合わせはメイジャー(541)2508へ

平日	11:30	3:30	6:30	上映時間
日曜	11:30	2:30	5:30	■入れ替え制・自由定員制